

日本語のターン交替とあいづち

— 母語話者と学習者の比較をとおして —

大 浜 るい子
(2000年9月30日受理)

Typen von Turn-taking und Backchannels im Japanischen

Ruiko Ohama

Dieses Papier behandelt die Beziehung zwischen Typen von Turn-taking und japanischen Backchannels. In natürlichen Gesprächen zwischen Japanern haben wir 7 Typen von Turn-taking gefunden. 2 Typen davon, die als Vermeidung von Turn-taking charakterisiert werden, scheinen vielleicht typisch für das Japanische zu sein, denn sie sind in Sacks/Schegloff/Jefferson (1974) nicht aufgeführt. Und wir konnten auch entdecken, daß jeder Backchannel in Bezug auf Turn-taking eigene Plätze hat. D.h. wir konnten vier Gruppen von Backchannels unterscheiden; (1) keinen Turn nehmen: "un", "uu-n", "hai", "haa", "wiederholen" und "lächeln". (2) einen Turn nehmen: "oo" und "e". (3) einen/keinen Turn nehmen: "a", "aa", "fu-n", "so-nan" "honto" und "iine". (4): von den Partnern einen Turn erhalten : "iya". Nicht alle Turn-taking brauchen nicht unbedingt Backchannels ,aber alle Backchannels brauchen eigene Typen von Turn-takings.

0 はじめに

あいづちが日本語の会話において特に重要な働きをしていることは、既に多くの研究が明らかにしているところである (Maynard 1986, 松田 1988, 渡辺 1994, メイナード 1996, 堀口 1997)。使用頻度の高さから見ても、種類の多さから見ても、それはおそらく正しい指摘であろう。しかし、どのように重要な働きをしているかということになると、いまだ十分に明らかではない。従来のあいづち研究では、分析以前にその機能を決めてかかっているものが多い。あいづちを定義するのに機能が持ち出されることもしばしばである。しかし「話を聞いている」や「分かった」などを伝えるためになぜ日本語にこれほど多くの表現があり、またなぜこれほど頻繁にそれを伝えなければならないのか説明されることはない。

また、機能間の関係についても明らかではない。例えばあいづちの機能として、「聞き手としての役割表示機能」「ターン譲渡表示機能」「内的感情表示機能」「情報提供要請表示機能」などがあげられているが、いずれも独立した機能とは考えにくい (堀口 1997)。聞き手としての役割表示機能は同時にターン譲渡表示機能を表すし、反対、驚き等の内的感情を表示する機能

は、効果として言い直しや追加説明を相手に求める情報提供要請の表示機能をもつことがあるからである。にもかかわらず、個々のあいづちはこれらのうちのどれかの機能をもつと説明される。上記の機能はそれぞれ「会話の役割」「ターン交替」「話し手のモダリティ」「発話行為」に関わる機能であり、言ってみれば「レベルの異なる機能」である。レベルが違えば、一つのあいづちに同時に認められるものとも思えるが、それらは数多いあいづちを区別するために考え出されているようである。

従来の研究は、日本語のあいづちを英語圏の Backchannels と類似のものと考えてきたため、なにか重要なことを見落としているのではないだろうか。機能から出発するのではなく、もう一度実際の談話の中へ戻し、出現環境や分布を観察する必要があるだろう。

ここで取り上げるのは、特にターン交替の場としての環境とあいづちの関係を探るものである。資料には日本人学生の談話と留学生の談話を用いるが、両者の比較を通して日本語母語話者による日本語談話の特徴を鮮明にしたいと考えるのと、学習者に対するあいづち教育への指針を得たいと考えるためである。

1 資料の概要

分析資料には、1997年11月に資料収集を目的に実施された大学生2人1組による自由談話をを用いた。実施場所は広島大学キャンパス内。談話は日本人学生によるもの14組と外国人留学生によるもの14組、計28組である。テーマは自由としたが、例としてあげた「夏休みをどう過ごしたか」を選んだものが大半を占めた。留学生の出身地は中国、台湾、タイ、韓国、マレーシア、オランダ、アメリカと様々であったが、ここでは一括して学習者と扱っている。また留学生の日本語能力は中級以上であった。

2 資料に現れたあいづち

我々の資料に現われたあいづち総数は、母語話者の談話で620、学習者の談話で473であった。表1から明らかのように、あいづちには非常によく用いられるものと、そうでないものがあることが分かる。中には1度きりの出現というあいづちも結構あり、ここではある程度似たものをまとめ、その上で上位21の表現タイプを分析の対象とした。

表1 母語話者と学習者のあいづち比較

	日本語母語話者	日本語学習者
あ、あつ	44	47
ああ、あーあ	83	35
いや、いやあ、いえ	16	11
いいねー、いいですよ	11	2
うん、ん、んん、うんうん	141	144
うーん、あーん	45	19
本当ですか、ほんとに	16	2
えっ	38	22
えー	8	14
おお	12	1
はい、はいはい	15	35
はあ、はあはあ	11	9
ええ(下がる)	1	4
そう、そうそう	11	20
そうなん、ほうなん	19	15
そうですね、そうよね	6	28
そうですよ、そうだよ	1	6
ふーん	21	13
まあまあ	10	5
繰り返し	62	16
笑い	37	20
その他	12	5
計	620	473

その上で全体的な傾向を母語話者と学習者で比較すると、「うん」はどちらにもよく用いられている。「あ」も数は減るが両者で同様の傾向にある。一方母語話者に多く見られるのは「ああ」「繰り返し」「うーん」「笑い」であり、反対に学習者に多いのは「そうよね・そ

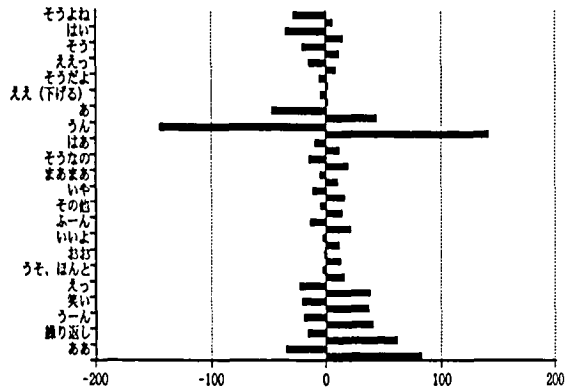


図1 母語話者と学習者の出現あいづち数比較

うですね」「はい」であることが分かる。ただこれらの違いはあるものの、図1を見ると、あいづちの種類にしても使用頻度にしても大筋では非常に似通っている。先行研究では、学習者と母語話者のあいづちには大きな違いがあると指摘されることが多い(堀口1997)が、我々の資料の学習者は、あいづちの学習がかなり進んでいるように見える。

ところが、実際の使用例を見ると、問題のあるものも少なくない。(発話者を示す記号(J1(母語話者の1)、F1(学習者の1)の後の()内の記号はターン交替のタイプ(図2参照)を表わしている。)

F3 : 好い男見つけました?

F4(d): 好い男ね、やっぱりね、そんなにはいなかったんだけど、でもそれなり楽しかったよ、みんなで遊んだから

F3(c): そうですね、まー、楽しかったらまーそれだけでもいいですね

F5 : つまらない夏休みだったのよ

F6(c): え、どうして

F5(d): ずっと家にいてどこへも行かなかった

F6(c): え、どうしてずっと家にいて

F5(d): あ、私外に出ると日に当たるのは嫌で、だからずっと部屋に本を読んだりして

F6(c): へえ、だから勉強の夏

F5(c): 勉強? しなかった

F6(c): はい、あのう、あのねつまらない夏ですって、あの来週の土曜と日曜日私たち一緒に遊びに行かない

適切なあいづちであるためには、直前の発話内容と齟齬をきたしてはいけないうら、また表現したい内

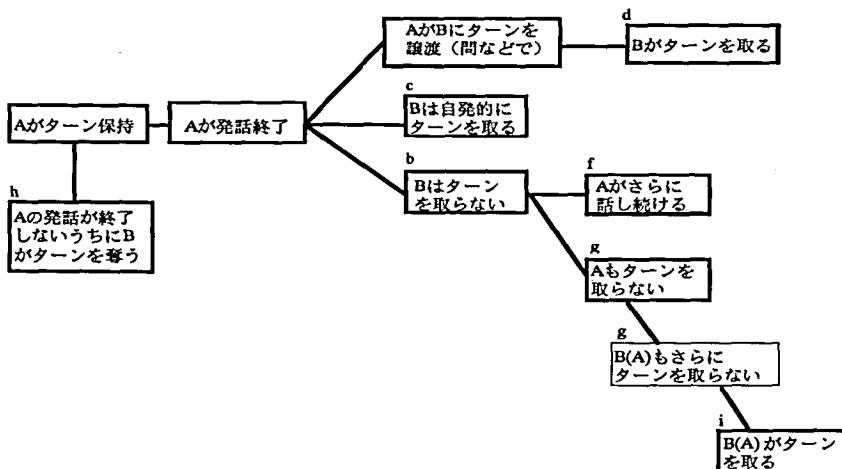


図2 ターン交替の7タイプ

4 ターン交替形式と使用傾向

ターン交替に7タイプがあることが分かったが、これらは平等に選択可能なものとして談話者達に認識されているのだろうか。表2は、母語話者と学習者がとったターン交替のタイプ別の出現数とターン交替全体の中で占める割合を示したものである。

表2 母語話者と学習者におけるターン交替のタイプ別出現比較個数(%)

	h	c	f	i	d	b	g	合計
日本語母語話者	13 (1.8)	170 (23.8)	71 (9.9)	68 (9.5)	80 (11.2)	198 (27.7)	114 (16.0)	714 (99.9)
日本語学習者	8 (1.2)	162 (24.8)	90 (13.8)	42 (6.4)	106 (16.2)	177 (27.1)	68 (10.4)	653 (99.9)

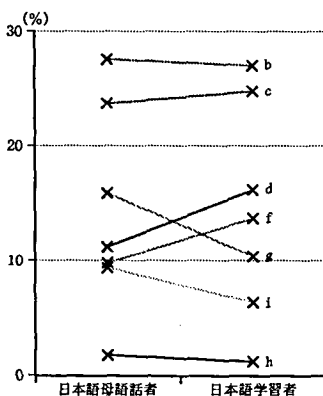


図3 母語話者と学習者のターン交替の使用タイプ比較

図3は、その割合を母語話者と学習者で比較したものである。ここから明らかになることは、母語話者においても学習者においても、相手が話している最中にターンを奪うというやり方(h)はほとんど見られな

いことである。これは Sacks/Schegloff/Jefferson (1974) 達が指摘したとおり、例外的な現象なのであろう。また最も好んで選ばれたタイプは、現在の話し手が話し終わったところで、誰か別の人物が自己選択をするcタイプと自己選択をせずターン取得を放棄するbタイプで、これは母語話者でも学習者でもほぼ同様の傾向であった。

ところが、母語話者と学習者で大きく異なったのは、以下の2点であった。

- (1) (d)、(f)タイプは学習者の方が母語話者よりも高頻度で使用する傾向にある。
- (2) (e)、(i)タイプは母語話者の方が学習者よりも高頻度で使用する傾向にある。

(d)、(f)タイプというのは、Sacks/Schegloff/Jeffersonがターン交替の(a)、(b)のケースとしてあげたものである。現在の話し手が次の話し手を指定するケースと、指定がなかった時に誰からも自己選択がなされなかった後に現在の話し手が話し続けるケースである。一方(e)、(i)というのは、Sacks/Schegloff/Jeffersonには見られなかったが我々が新たに付け加えたターン交替のタイプで、TRPで自己選択がなされなかった時、現在の話し手も話し続けず、さらにその後も誰からも自己選択がなかったケースと、それらが何回か繰り返された後やっと自己選択がなされたケースである。

ここから、母語話者には、学習者との比較において「現在の話者が次の話者を選択しない傾向」があり、「自らターンの取得を申し出ない傾向」があることが見てとれる。ターンの譲渡や取得というターンの配分自体に自ら関わることを避けようとする傾向と言っている

だろう。反対に学習者の方は母語話者との比較において、ターンの配分に積極的に関わる傾向にあると言える。このターン配分への関わり方の違いは、談話展開へのイニシアティブの取り方の違いとして、岡崎(1987)、Watanabe(1993)、大浜(1998)、丸井(2000)に同様の指摘が見られるが、日本語の会話への貢献や協調は、欧米社会で考えられているように自らが発話権を取り多くの情報を提供することではなく、相手に発話権を取らせ相手に多くを語らせることであると言えそうである。この様に異なる事情を背景にもったBackchannelsと日本語のあいづちは談話内での位置づけもまた異なるのではないと思われるが、次節ではターン交替形式とあいづち間の関係について見ていこう。

5 ターン交替のタイプとあいづちの関係

表3、4はターン交替のタイプ別出現数と各タイプで出現したあいづちの数を示したものである。aはターン交替の形式ではないが、相手の発話途中に現れたあいづち数を示すために仮にここへ入れた。他の形式とは性格が異なるため、出現頻度は出していない。

表3 日本語母語話者によるターン交替数と出現相づち数、出現頻度

ターン交替形式	h	c	f	i	d	b	g	a	合計
ターン交替数	13	170	71	68	80	198	114	--	
出現あいづち数	2	109	19	26	46	218	121	79	620
出現頻度%	15.4	64.1	26.8	38.2	57.5	110.1	106.1	--	

表4 日本語学習者によるターン交替数と出現相づち数、出現頻度

ターン交替形式	h	c	f	i	d	b	g	a	合計
ターン交替数	8	162	90	42	106	177	68	--	
出現あいづち数	1	109	20	11	65	166	51	50	473
出現頻度%	12.5	67.3	22.2	26.2	61.3	93.8	75	--	

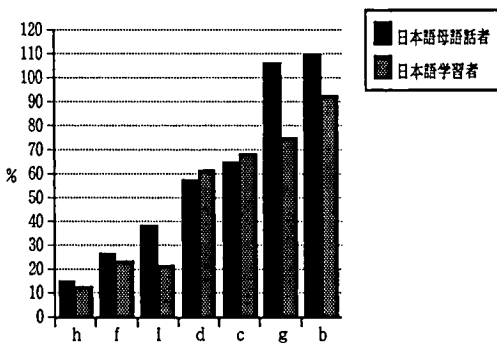


図4 ターン交替時のあいづち出現比較

先にあいづちの数や種類別の出現頻度について、母語話者と学習者で大きな違いがないことを見たが、

ターン交替のタイプ別のあいづち出現頻度についても非常に似た傾向を示していることが分かる(図4参照)。その意味では、学習者たちは母語話者と同様のあいづちを使用し、しかも母語話者と同様の場所で同様な頻度で使用していると言える。ここでも学習が進んでいることが裏付けられる。

では次に、各ターン交替形式においてどのようなあいづちが使い分けられているのかという点について見ていこう。表5、6は各ターン交替形式に対してどのようなあいづちがどのくらい使用されたかをまとめたものである。

表5 あいづち別に見たターン交替のタイプ別出現分布(日本語母語話者)

	h	c	f	i	d	b	g	a
あ	1	17	1	2	4	16	1	2
ああ	0	18	3	0	5	21	33	3
いや	0	1	2	3	10	0	0	0
いいね	0	3	0	0	0	5	3	0
うん	0	11	3	2	10	30	37	48
うーん	0	1	2	1	5	16	13	7
本当ですか	0	4	0	0	0	8	3	1
えっ	1	17	2	9	3	4	2	0
えー	0	2	0	0	0	2	0	4
おお	0	8	1	0	0	2	1	0
はいはい	0	2	0	0	1	9	1	2
はあ	0	1	0	0	1	9	0	0
ええ(下がる)	0	0	0	0	0	1	0	0
そう	0	2	0	0	2	3	2	2
そうなん	0	4	0	1	0	9	5	0
そうよね	0	1	0	0	1	3	1	0
そうです	0	0	0	0	0	0	1	0
ふーん	0	5	1	3	0	7	5	0
まあまあ	0	2	1	2	2	2	1	0
繰り返し	0	6	0	2	0	47	3	4
笑い	0	3	0	0	2	18	8	6
その他	0	1	3	1	0	6	1	0
合計	2	109	19	26	46	218	121	79

表6 あいづち別に見たターン交替のタイプ別出現分布(日本語学習者)

	h	c	f	i	d	b	g	a
あ	1	18	1	2	7	11	2	5
ああ	0	10	0	1	6	12	2	4
いや	0	4	1	0	5	1	0	0
いいね	0	1	0	0	0	1	0	0
うん	0	21	10	3	16	45	23	26
うーん	0	3	0	0	4	6	4	2
本当ですか	0	1	0	0	0	1	0	0
えっ	0	12	2	1	1	5	0	1
えー	0	3	0	2	4	5	0	0
おお	0	0	0	0	1	0	0	0
はいはい	0	7	1	0	7	11	3	6
はあ	0	1	1	0	0	4	3	0
ええ(下がる)	0	0	0	1	1	1	1	0
そう	0	5	1	1	3	7	2	1
そうなん	0	1	0	0	1	12	1	0
そうよね	0	12	0	0	2	12	1	1
そうです	0	1	0	0	1	3	1	0
ふーん	0	3	0	0	0	6	2	2
まあまあ	0	2	0	0	3	0	0	0
繰り返し	0	1	2	0	3	8	1	1
笑い	0	1	1	0	0	12	5	1
その他	0	2	0	0	0	3	0	0
合計	1	109	20	11	65	166	51	50

図5は、各あいづちがどのタイプのターン交替時に使用される傾向があるを見るため、使用頻度が10.0%以上のものを抜き出し、まとめたものである（h、fは事例が少ないため省略）。

日本語母語話者						
	d	i	c	b	g	a
繰り返し				■		
はあ				■		
はい				■		
うん				□	□	■
うーん			□	■	□	□
笑い				■	□	□
ふーん			□	■	□	
そーなん			□	■	□	
いいね			□	■	□	
本当			□	■	□	
ああ			■	■		
あ			■	■		
おお			■	□		
えっ		□	■	□		
いや	■	□				
そう						
そうよね						

日本語学習者						
	d	i	c	b	g	a
繰り返し	□			■		
はあ				■	■	
はい	□		□	■		
うん			□	■	□	□
うーん	□		□	■	□	
笑い				■	□	
ふーん			□	■	□	□
そーなん				■		
いいね						
本当						
ああ	□		□	■		
あ	□		■	□		
おお						
えっ			■	□		
いや	■		■			
そう			□	□		
そうよね			■	■		

■：30.0%以上 □：20.0%以上30.0%未満 □：10.0%以上20.0%未満

図5 あいづち別に見た出現傾向の高いターン交替タイプ

まず母語話者の方を見ると、各あいづちには出現しやすいターン交替タイプがあることが分かる。そしてそ

れは大きく分けて次の4グループに分けることができる。

(1) ターンを取らない時に多く用いられるあいづち

bのみに現われるあいづち：繰り返し、はい、はあ
b、g、aに現われるあいづち：うん、うーん、笑い

このグループのターン交替タイプb、g、aは、いずれもターンをとらない点で共通している。そこにもつばら現れるこれらのあいづちは、ターンをとらないときに用いられるあいづちであると言っていいだろう。b、g、aいずれにも出現するあいづちにくらべて、bのみに現われる「繰り返し、はい、はあ」は情報提供が完了していない段階(a)や提供された情報に直接後続していない時、すなわち既に一度bというあいづちのみの反応があった後(b)には使用されにくいあいづちであることを示している。

(2) ターンを取る時に多く用いられるあいづち

cのみに現われるあいづち：おお
c、iに現われるあいづち：えっ

c、i、すなわちターンをとる場面に優先的に出現するあいづちはターンをとるときに用いられるあいづちであると言っていいだろう。「おお」も「えっ」も驚きを表す表現であることが共通している。ただ、「おお」は、ここでは数が少ないので、cのみに現われるということとc、iに現われる「えっ」と区別して論じることは控えたい。自らの意志でターンをとる場面に出現するあいづちが「驚き」を表すあいづちであることは特記すべきことである。これについては後述する。

(3) ターンの取得とは無関係に用いられるあいづち

c、b、gに現われるあいづち：ああ、ふーん、
そうなん、本当ですか、いいね
c、bに現われるあいづち：あ

(1)(2)は、それぞれターンをとらない時のあいづちとターンをとる時のあいづちであったが、このグループに属するあいづちはいずれの場合にも出現するあいづちである。その意味では、ターンに関しては何も語らないあいづちだと考えられる。また、c、b、gはいずれも相手の発話が完了した後のターン交替タイプなので、これらのあいづちは「相手の発話をまとまった

情報として処理した」ことを前提にしているが、gに現われない「あ」は、c、b、gのいずれにも現われる「ああ」「ふーん」「そうなん」「本当ですか」「いいね」とは違って、相手発話の処理直後にのみ用いられる。一方のc、b、g内には出現するあいづちは、情報処理の直後にもそれ以降にも用いられる。

(4) ターンを譲られた時に用いられるあいづち

dのみに現われるあいづち：いや

dは現在の話し手が問いなどによって次の話し手を選択する場合である。だが、この「いや」は問いかけへの否定の応答ではなく、以下の例のように用いられるものである。

- J 5 : 誰が残ったったん?
 J 6(d): いや、市内の友達とかね、残ってから
 J 7 : 何やってたん?
 J 8(d): うん、いや
 J 7(h): 黒くなったなー
 J 8(e): 分かる?

以上あいづちを4つのグループに分けることができることを見たがここで「えっ」について一言触れておこう。図5を見ると、ターン交替のタイプiにはあいづちは現れにくいことが分かる。ただ一つの例外は一見驚きを表すような「えっ」というあいづちである。ターン交替のiタイプというのは、その直前に相手がいづちのみで、ターンを取っていない場合のことである。その意味ではもともと驚くような情報の提供はない。にもかかわらず、次の例が示すように、発話に先立ちこのあいづちが用いられている(太字参照、[]は情報のないあいづちだけの発話が続いた後であることを示す)。

- J14: 海とか行かんかったん? うっそ
 J13: う、行ってないよ全然 行く人
 J14: そうなん 私は海行つたで
 J13: いないもん うん うそ、何回も?
 J14: え 一回やけど うん PPかな
 J13: 何回? 一回? どの海? あー
 J14: サークルでな え、ううん、2泊3
 J13: へえ一週間ぐらい?
 J14: 日かな え うん
 J13: へえいいな そうか私お盆も家に帰らないで勉

- J14: 親不孝やね うんうん うん
 J13: 強してたんだよ うん でもね 成
 J14: あ成果なかった 今から考えたらないよね、
 J13: 果なかった うん、帰ればよかった
 J14: なんかね うーん
 J13: うん あの時実家に帰ればよかったなあと
 J14: うーんまあね うん
 J13: か うん あーそうなんだ、今からえっ
 J14: えっ今からってこれから?
 J13: 今からどうすんの? 授業?
 J14: 授業ないよ今日は
 J13: あ、ないの、いいなあ(統)

資料をこの点から観察し直すと、「えっ」だけではなく「あっ」「ええー」「へえー」が同様の環境で出現していることが分かった。目下のテーマではもはや話が発展せず、あいづちだけで間が保たれているときに、新しいテーマの導入者が、あたかも相手から直前に驚くべき情報の提示があったのを受けて発言するかのようによそおうのである。我々は、日本人母語話者のこの現象を、ターン交替のg、iタイプが多かったことと関係があると考えている。即ちターン配分へのイニシアティブを避ける傾向、あるいはもっと一般的に言うところ談話展開上のあらゆる点でイニシアティブを避ける傾向と関係があるのではないかと思う。新しいテーマの導入を既に導入済みと見なし、自己選択によるターン交替を、興味深い情報提供によって発話に導くよう仕向けられたターン譲渡の形にしつらえているのである。詳細は別の機会にゆずりたいが、これら驚き表現のあいづちはその約半数がこの様な環境での使用であった。また直前に情報内容をもった相手の発話がある場合も、これまではそれらの情報に対して驚きを表明していると理解してきたが、ここでの観察をふまえると、あるいは本来の驚きではなく、驚き表現を利用した「イニシアティブ回避のストラテジー」であるかもしれない。これは今後の課題である。

以上、ターン交替のタイプによって用いられやすいあいづちのあることを見てきたが、では学習者達はどのようにあいづちを使用しているのだろうか。同様に図5を見ながら、母語話者達と異なる使用をあげると以下のようになる。

(1) 母語話者に使用される「そーなん」「いいね」「本当」などのあいづちが使用されないか、されても適用範囲が狭い。c、b、gに使えらるあいづちが学習されていないと言えらる。

(2) 母語話者にはあまり見られなかったあいづち「そう」「そうですね」タイプがよく用いられる。下に示すいずれの例も自分の知らない情報を受け取ったときの応答なので「そうですね」は不自然である。学習者はこれらのあいづちをc、bで用いているが、(1)のc、b、gに使える「そーなん」「いいね」「本当」で代替すれば、全て適切なあいづちとなる場所である(()内にそれを示す)。

F 1 : 5時ならもう終わってる時間ですね

F 2(b): あ、そう

F 1(f): あそこ3時までだから

F 2(b): *そうですね (そーなん/本当)

F 1(f): どっか外にしましょうか

F 2(d): そうしましょうか

F 3 : 夏休み、何しました?

F 4(d): 夏休みね、あのう今回の夏休みにはね、ちょっと韓国にも帰らなかったし

F 3(b): *そうですね (そーなん/本当)

F 4(f): それでね、ちょっと友達と色々合コンに出たの2回くらい

F 3 : 好い男見つきました?

F 4(d): 好い男ね、やっぱりね、そんなにはいなかったんだけど、でもそれなり楽しかったよ、みんなで遊んだから

F 3(c): *そうですね (そーなん/よかったね/本当)

まー、楽しかったらまーそれだけでもいいですね

(3) 母語話者では限定的に使用されているあいづちが、学習者では限定されず広い範囲で使用されている。母語話者ではbに限定されていた「はい」や「はあ」が、学習者ではそれぞれcやgで使用されている。(2)で見たほどには違和感はないが、それぞれcやgに属する「ふーん、そーなん、ほんとう、ああ、あ」「うん、笑い」であればもっと自然な感じになる。

F 5 : つまらない夏休みだったのよ

F 6(e): え、どうして

F 5(d): ずっと家にいてどこへも行かなかった

F 6(e): え、どうしてずっと家にいて

F 5(d): あ、私外に出ると日に当たるのは嫌で、だからずっと部屋に本を読んだりして

F 6(c): えへ、だから勉強の夏

F 5(e): 勉強? しなかった

F 6(e): *はい (ふーん/そーなん/本当/ああ/あ)、

あのう、あのねつまらない夏ですって、あの来週の日曜と日曜日私たち一緒に遊びに行かない

F 1 : 何したいですか、卒業してから

F 2(d): 卒業してから世界をまわり、まわり、旅行する

F 1(b): そうですか

F 2(e): *はあ (うん/笑い)

F 1(i): でも仕事は困らないですか

(4) ターンを譲渡されたとき(d)に用いられるあいづちが母語話者よりも多種である。下の例の「うーん」は答え方を考えているようで許容できるようにも思われるが、一回しか行ったことのない場所であれこれ迷うほどの印象もないのではないかと、また家族との再会の印象を考え込むのも変ではないかと、多少の不自然さを感じないわけにはいかない。「いや」かあるいはあいづちなしに即座に応答するのが適切である。

F 9 : 浅草、浅草も行ききました

f 10(b): あー、浅草

F 9(f): 浅草行ったことがありますか

F 10(d): *うーん (いや)、浅草はあのう一回行ったことがあるんですけど、面白いところですね

F 7 : F 8さんは?

F 8(d): 私はタイへ帰ったんです

F 7(b): ああそうですか

F 8(e): うん

F 7(i): どうだった?

F 8(d): *うーん (いや)、いい気持ちです、家族と会ったから

F 11 : でも始めたばかりじゃ、えっ何かあったの?

F 12(d): *何かあった? (いや) 前での試験あったんだけど

6 おわりに

以上、日本語母語話者と日本語学習者のあいづちをターン交替現象と関連づけながら見てきたが、ここではそれらをあいづち指導の現場にどのように生かせるかについて考察したい。最も重要なことはあいづちイコール Backchannels ではないという指導ではないだろうか。あいづちを Backchannels であると考えているかぎり、なぜかとも頻繁に、そして多種多様な表現が使用されるかということに対して、日本人の協調精神あるいは調和への嗜好性などが強調されることにな

る。しかし、それよりももっと会話の仕方、談話展開のスタイルの違いに注目させたい。

岡崎(1987)が指摘するように、欧米は「他の会話参加者との競合の中でいかに話順を取り、自己の積極的な表現のために獲得した話順をいかに長く保持するか、他者との対立点を鮮明に打ち出すようにいかに談話を展開するか、そして自分の話が誤って理解された場合いかに反駁するかといった、いわば話者としての権利の確保に焦点が当てられている」文化である。ここでは、他の多くの発話が自己主張である中で、あえて1音節か2音節で口を閉じるあいづちは自らが選んだ「ターンを取るつもりはない」という自己主張であるという位置づけがふさわしいかもしれない。

しかし、日本語では、話順を主張するのではなく、共話のように分け合うスタイルが取られたり、また話の方向づけを自分がしないように質問ではなく繰り返し(あいづちの一種)が好まれる(大浜1998)ことが分かっている。ターンについても他者への配分も自己への配分も控える傾向にあることがわかった日本語では、あいづちは、「発話」をより控えめにし、より短くし、より対立をなくしていったものと考えるのがあたっているのではないだろうか。欧米のBackchannelsが「ターンを取らない」ということを示すだけであるならば、数少ない種類で間に合うことも頷ける。一方日本語のあいづちが、たとえ短く単純にしたものであってもそれが「発話」とすれば、様々な伝達内容を表すはずであり、それに応じた多くの形態が必要になることも頷ける。またそのような視点は、あいづちを一つのまとまったものとして指導するのではなく、目的達成の技術(例えばターン交替上技術)として、個別的に切り離した取り扱いを求めることになる。

本研究では、あいづちがもっている、ターン交替の側面に焦点を当て、その上で大きく分けて「ターンを自己選択するとき」「ターンを自己選択しないとき」「その両方の時」「ターンを譲渡される時」の4つの場面で使用できるあいづちを特定した。これを学習するだけで適切なあいづち使用ができるようになるというわけではないが、あいづちの一つの機能、すなわちターン交替のための技術的側面という観点からの指導には役立たせるのではないかと考えている。

付記：本稿は2000年度前期に広島大学教育学部に開設された社会言語学演習での作業や議論が下敷きになっ

ている。参加者の木南圭映子、杉田哲史、曾儀婷、谷口麻衣、福田真由美の各氏に感謝する。また、本研究は平成12年度文部省科学研究特定領域研究(A)(2)「言語学・心理学・教育学に基づく日本語 CALL コースウェアの研究」(研究代表者：大浜るい子、課題番号：12040227)の助成を受けて行なわれた。

参考文献

- 大浜るい子/山崎深雪/永田良太(1997)：「道聞き談話におけるあいづちの機能」『日本語教育』96号 113-124.
- 大浜るい子(1998)：「日本人の言語行動 - 談話展開のためのストラテジー」『広島大学日本語教育学科紀要』第8号 97-105.
- 岡崎敏雄(1987)：「談話の指導初～中級を中心に」『日本語教育』62号, 165-178.
- 島弘己(1988)：「外国人のための日本語会話ストラテジーとその教育」『日本語学』7-3, 100-117.
- 堀口純子(1997)：『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 松田陽子(1988)：「対話の日本語教育学-あいづちに関連して-」『日本語学』7-12, 59-66.
- 丸井一郎(2000)：「日独語談話の対照研究：電話談話の開始部を中心に」『国際社会文化研究』高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科紀要
- Maynard, K. (1986): On back-channel behavior in Japanese and English casual conversation. *Linguistics*, 24.
- メイナード・泉子・K (1996)：『会話分析』くろしお出版
- Sacks, H./Schegloff E./Jefferson G. (1974): A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 696-735.
- 渡辺恵美子(1994)：「日本語学習者のあいづちの分析 電話での会話において使用された言語的あいづち」『日本語教育』82号
- Watanabe, Suwako (1993): Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions. In: D, Tannen (ed.) *Framing in Discourse*. Oxford Uni. Press. 176-209.
- White, Sheida (1986): Functions of backchannels in English: A cross-cultural analysis of Americans and Japanese.